

Gymnasium成立史考（補遺）

— Wimpfelingの「Gymnasium計画」について —

Zur Entstehungsgeschichte des Gymnasiums,
ergänzt von Jakob Wimpfelings Gymnasium-Projekt

山内 芳文 ・ 三輪 貴美枝

【要旨】

本稿は前稿（本誌前号）の補遺であって、ここでは、そこで取り上げられたヤコブ・ヴィンプフェリンク（1450-1528）の「ギムナジウム計画」を、それが収められている著作『ゲルマニア』（1501）の文脈のなかで位置づけ直されるはずである。ドイツ、ことにシュトラスブルクを中心都市とするエルザス（アルザス）をフランスの影響から遮断してドイツの誇りと名誉を再認識させようと強調する第1部と、それを承けて展開されるシュトラスブルクの運営について詳述される第2部、ことに後代におけるその担い手を育成するための中心機関である「剣闘学校」Fechtschule（Gymnasium）の基本的な性格、ゲルマンの歴史認識と「敬虔なる雄弁」が浮き彫りにされる。なお、その趣旨を述べた部分と「子どもの教育」と題する原文の断片を邦訳して付した。

【キーワード】

ギムナジウム 剣闘学校 ヴィンプフェリンク 『ゲルマニア』
シュトラスブルク（ストラスブール）

【Abstract】

Dieser Aufsatz gilt für einen ergänzenden Teil des im vorigen Jahr veröffentlichten Berichtes und hier soll das Schulprojekt von Jakob Wimpfeling (1450-1528), das in diesem Bericht behandelt worden ist, diesmal im Kontext der dasselben Projekt enthaltenden Schrift "Germania" (1501) wieder gestellt werden. Im ersten Kapitel dieses Werkchens suchte Wimpfeling Deutschland, besonders Elsaß, dessen Zentrum Straßburg ist, aus dem Einfluß des Franzosentums auf das Deutschtum zu sperren und noch einmal Stolz und Ehre Deutschlands anerkennen zu lassen. Im zweiten erörterte er verschiedene praktische Angelegenheiten über die straßburgische Stadtverwaltung, ins besondere über die

Grundcharakter der Fechtschule ('Gymnasium' auf Lateinisch). Und hier schält sich die germanisch historische Erkenntnis und die "fromme Beredsamkeit" aus. Dazu sind noch zwei ins Japanisch übersetzten pädagogischen Fragmente Wimpfeling's beigelegt.

【Keywords】

Gymnasium Fechtschule Wimpfeling *Germania*
Strasburg (Strasbourg)

はじめに

稀代の教養人であったヤコブ・ヴィンプフェリンク (Jakob Wimpfeling 1450-1528) がハイデルベルクからシュトラスブルク (仏名: ストラスブール) にやって来たのは、1501年の夏のことであった。ヴィンプフェリンクがハイデルベルクを去るにあたっては、親しくしていた友人たちが相次いでこの地を去るなど、いろいろな事情があったようだが、ハイデルベルクでの教授職を投げ打ち、またウーテンハイム (Christoph v. Utenheim c.1450-1527) を通して舞い込んできたバーゼルの司教への勧誘を断ってまで、必ずしも厚遇とは言えないシュトラスブルクの教会の食客という不安定な立場に自らを追い込むようなことは、当代にあってもなかなか理解できないことであった。クネッパー (Joseph Knepper) の『ヴィンプフェリンク』(Jakob Wimpfeling 1450-1528 *Sein Leben und Seine Werke* 1902) は定評のある評伝だが、これによれば (SS. 256 ff.)、ヴィンプフェリンクは、この年、郷里のシュレットシュタット (仏名: セレスタ) にいた母を喪い、死に目にもあえず葬儀にもろくろく立ち会えなかったことから、墓碑を建てたり、ハイデルベルクと郷里とを往復するなど、その後のことで多忙な日々を過ごしていたという。ヴィンプフェリンクがシュトラスブルクに来ることを期待していたガイラー (Johannes Geiler von Kaisersberg 1445-1510) は、バーゼルの話に大変な不快感を示したようで、その後は以前にも増してより積極的にヴィンプフェリンクの勧誘に動き出す。バーゼルからの話は、実際は「司教」(Bischof)ではなく、ウーテンハイムの協力者としてであった。他ならぬウーテンハイム自身が翌(1502)年には司教に就任しているからである。いずれにしても、ヴィンプフェリンクの行き先はバーゼルではなく、シュトラスブルクであった。シュトラスブルクでのヴィンプフェリンクがまず関わったのが、ガイラーが中心となって進行中であったジェルソン選集の第4巻の編纂事業であった。ジェルソン (Jean Gerson 1363-1429) は、これよりほぼ100年まえのコンスタンツ公会議を仕切り、教会再一致の立役者であった。その選集はすでに3巻まではガイラーとその友人ショットによって完成しており、ヴィンプフェリンクはよろこんでこれへの参加を承諾し、翌年までシュトラスブルクに滞在するこ

とになった。その年の12月24日にかつて勤務していたズルツの教区教会から退職金24グルデンが支払われたが、彼の生計は当分それによって賄われた。ヴィンプフェリンクは特定の役職に就かず、ジェルソン選集の仕事以外は、司教座の幹部であったガイラーの庇護のもと、かなり自由に、この都市での生活を満喫したと思われる。ことに、ガイラーの推薦で知り合いになったセバスティアン・ブラント（Sebastian Brant 1458-1521）とは無二の親友となった。前稿では詳しくは触れなかったブラントについては、当稿の「補遺」として若干の補足をしておかななくてはならない。ブラントの『阿呆船』については、すでにすぐれた邦訳があり（尾崎盛景、現代思潮新社、2010）、その上巻に収載された訳者による解説では、ブラントはシュトラスブルクの市政顧問、バーゼルで教会法と市民法の学位を得て、当地の大学で法学部の教授を勤め、法学部長にも選ばれていたとされている。そのブラントがバーゼルを去って、郷里のシュトラスブルクに戻ったのは、1499年のドルネックの戦いで神聖ローマ帝国（ドイツ）皇帝マクシミリアン1世がスイス同盟軍に敗れ、講和の約定によって、バーゼルが完全にドイツから離れたことによる。ヴィンプフェリンクの『ゲルマニア』（*Germania*）が執筆されたのは、1501年のことであった。そして、その背景には、ブラントと共有された「ドイツ」への強い郷土愛があったとみておいてよい。

『ゲルマニア』第1部について

『ゲルマニア』は、もともとラテン語で執筆されたようで、ヴィルヘルム修道院からとされた1501年10月14日付けの献辞は都市参事会に宛てられ、これはまもなく印刷に付され、ドイツ主義の予言者としてのヴィンプフェリンクの名はアルザスやライン地方に知れ渡ることになった、と前記のクネッパパーは記している。その冊子はさらにドイツ語の文章にまとめられて、ラテン語を解さないシュトラスブルクの参事会員に配布された。有名なヴィルヘルム・ラインの教育事典に収められているヘーнк（H. Höhnk）の記事には1505年とされていることは前稿でも触れたが、このような状況を考慮すれば、その刊行、あるいはその後に複雑化した事情から、それがあながち間違いだと断定できないことも予想しておかななくてはならない。しかし、そのドイツ語による文章は印刷に付されたものではなく、どのような内容のものだったのかはわからない。比較的広汎に流布していたラテン語による『ゲルマニア』がドイツ語に訳されたのは、すでに前稿で紹介したように1648年、この年、モシャロッシュ（Moscherosch 1611-1669）によって“*Tutschland zu Ere der Statt Strasburg und des Rinstroms*”との表題で刊行されたのである。

われわれの知ることのできるヴィンプフェリンクの『ゲルマニア』はふたつの部分に分かれており、その第1部は、ライン地方の所有を窺うフランスへの厳しい対時の宣言であった。その内容は、徹頭徹尾、フランスへのドイツ人としての自己主張であった。ことに、このエルザス（仏名：アル

ザス)の地方でフランスの支配を受け容れようとしている住民に対しては、その不条理を懇々と説いている件が印象的である。以下、前記クネッパーの記述(S.136-140)によりながら、それをまとめておこう。多くの住民がフランスに心を寄せている状況を目のあたりにして、フランスの復讐心にまたとない歓迎のチャンスを与えてしまうと悔しがっている。「とりわけ、フランスの宮廷にいる半フランスのドイツ人たちは、その思いのために実際に行動を起こしている。彼らは明らかにフランス人に歓迎されており、フランス王がこの地を領有するかどうかはともかくとして、かつてローマの貴族がそうであったように、あなたがたは自らの支配によって何らかの名誉と栄光をもたらすのである」と、市参事会員への献呈文には記されていた。彼は、ライン左岸がかつてはフランス領であったと信じている者たちのこのような公然とした背信の跋扈を彼らの思い上がりと断じる。そのような誤りは、ヴィンプフェリンクにとっては、古来の物語や史記からも明白であるとされる。ヴィンプフェリンクは、ローマの皇帝たちの国籍についても議論を展開している。その結論は、カルル大帝いらい、彼らのなかではただドイツ人だけが見い出せるのであり、たとえ生まれや血筋がドイツ人でない場合でも、誰一人としてフランス人が戴冠した例はない、というものであった。確かに、ユリウス・カエサルは、ライン左岸を完全にガリア(当代ではフランス)に算入していた。そして、アルザスもかつてはガリアの領域であった。ヴィンプフェリンクは、このことを十分承知のうえで、ローマの史書を訂正して、カエサルは本来のフランスとライン河のちょうど真ん中にヴェジヒェンの山々(実際は標高500メートル前後の丘、13世紀にシュトラスブルク市参事会と激しく対峙した司教ゲロルゼックの別邸があった)が連なっているということを見落としており、それを越えてラインに突き当たるところまではドイツであって、フランスとは劇然と区別されると言って、シュトラスブルクを含むライン左岸がドイツ領であることを主張する。さらに、ヴィンプフェリンクは、カルル大帝の父、ピピン3世(短軀王、714-768)について、その賢さについてのエルザスで語り継がれている格言などから、彼がドイツ人であると推定し、またカルル大帝についても、その出生の地やドイツ語をとくに好んでいたこと、またフランス人がライン河を越えてドイツの地へ侵入しようとしているとき、それを撥ねつけ、ライン右岸のドイツへの入植の構想を推進していたことなどから、彼がドイツ人であったことは間違いないと指摘している。ヴィンプフェリンクは、東フランクは西フランク、すなわちドイツはフランスを支配さえしていたと言う。フランスに拠点を置く無能な最後のメロヴィングの当主は、教皇の支持と下知を得て、ドイツ人であるピピン3世に譲位したことがこれにあると指摘する。たしかに、カロリング朝を絶頂に導いたカルル大帝の本拠はライン河をかなり西に入り込んだアーヘンにあり、その勢力圏はライン左岸のみならず、はるか東方にまで及んでいた。ヴィンプフェリンクは、歴代のローマ教皇のうち、インノケンティウス3世こそカルル大帝の優位に立っていたかもしれないが、続くウルバヌス2世はあきらかに、(ドイツに道を譲った)誓約の援助者であったこと、さらにベネチアの歴史家サベリクスやペトルカなども同様の立場をとっていることも有力な傍証のひとつとしている。これらの見解は、さら

に遡って、古代ローマのタキトゥス（『ゲルマニア』や『年代紀』）やスウェトニウス（『ローマ皇帝伝』）のアウグストゥスについての叙述をまで援用して、ドイツのゲルマン、ゲルマンのドイツを主張する。そのひとつひとつについて、たとえそこに今日からみて明らかに牽強附会の部分が含まれているとしても、これを吟味することは、この「補遺」の目的ではない。ここでは、ヴィンプフェリンクが地政的ないしは歴史的にシュトラスブルクを含むラインの左岸をドイツ固有の領土であることを主張しなければならない事情があったということだけを確認しておけばよい。ことに最後のところで言及したローマ教皇の「役割」は重要である。ことにウルバヌス2世はクレルモン公会議を招集して主宰し、聖地エルサレム奪還のためにキリスト教国の一致団結を呼びかけ、十字軍の創設を主導したことで有名である。また、ヴィンプフェリンクは、「皇帝アウグストゥス（オクタヴィアヌス）によって、その叡慮が称賛されるべき場所のうえに置かれたラインのわが都市（シュトラスブルク）」がフランスではなく、ドイツであること、さらにガリアではなく、「ドイツ」と呼ばれていることを援用している。このようにして、ヴィンプフェリンクは、ドイツをフランスとの対抗の図式においてとらえたが、それが破局に向かうこととなった場合に、彼はシュトラスブルクの市民に、その自由を守り、隷従を迫るフランスに備えるために、皇帝と帝国の袖を掴んで放さないという現実的な手立てを忠告していた。ヴィンプフェリンクは、第1部の結論として、帝国に対して秘かに破壊的な活動を行い、エルザスをフランスの王の掌中に委ねることで、それを喜びとするフランス的な心情をもつ党派指導者たちへの厳しい警戒を促すことで、その結論を締めくくっている。

『ゲルマニア』第2部について

『ゲルマニア』の第2部は、対象としては、すでに紹介したような第1部とは、おおきく様相を変えている。クネッパは、「第1部でヴィンプフェリンクはドイツの人として登場したが、第2部ではフマニスト（人文主義者）ないしは教育家（Pädagog）として再登場している」（S.140）とさえ評している。それほど、このふたつの部分には内容的には一見して明らかな相異があり、取り扱われている内容は事例として（サッハリヒに）は緊密な連関などないに等しいとも言っている。第2部で扱われている内容は、たしかにシュトラスブルクという都市を国家に見立てた行政プランのようなものであった。「国家」のなかでの和合、公共の福祉、戦争への常備、近隣との平和や思い上がりの排除、財宝の管理、公正な立法などが、人文主義者の個性かもしれないが、ともすれば冗長と思われるほどに語られていた。ヴィンプフェリンクは3つの基本的な身分、すなわち聖職者、貴族、市民の存在を認めているが、都市の参事会員には、あくまでも理想的な市民を先頭にした構成を求めている。ことに、貴族、さらには帝国との平和的な友好を重視したヴィンプフェリンクに

つについては、すでに第1部で拘泥した当時のシュトラスブルクをめぐるフランスとの関係を視野に入れているとみることもできる。まさに、「市民と庶民が貴族によってではなく、貴族が市民と庶民によって選ばれている」のである。悪魔はその3つの身分を仲違いさせようとして、絶えず、そのそれぞれが互いに罵り、軽侮しあうようにし向ける。これを防ぐためには、それぞれが互いに他の職分を尊重し合うようにしなくてはならない。聖職者たちが労働をしないと非難などしてはならない。彼らの労働の場は地上での神の国なのである。市民は財を生み出し、貴族（都市においては「騎士」と言ったほうがよい）や聖職者を支え、騎士は都市の領土、住民の生命や財産をまもっている。このような「共生」の関係が都市の幸福、平和、そして繁栄をもたらしている。ヴィンプフェリンクは、このように考えていた。ここでは、「市友」(Mitbürger) という新しい概念が導入される。この「隣人愛」を基本原則として、法外な収入や財産への欲望、さらに市友を見下し、暴利を貪るようなことを抑止し、無私であり、公共の福祉のためには我が身の犠牲も厭わない。また、名誉を重んじ、貞潔でなくてはならない。たとえ若くして婚姻身分に入ったとしても、その妻の良き個性を伸ばし、悪いところ、例えばお喋りや口応え、移り気などの性格は抑え、その身分に相応しい扶養と服装を与えなければならない。どんなにバカげたことであっても、感情の弦をピンと張って、その指導(aufziehen)に努めなくてはならない。子ども、ことに男子の教育に関する親の心得については、一節の邦訳を付すことにしている。ここでは、ラテン語版でGymnasiumとされ、後にドイツ語でVähtschul、さらに新しくはFechtschule（普通名詞としては「剣闘学校」といった程度の意味）と呼称される学校の構想の輪郭について触れておく。

ヴィンプフェリンクにとって、そのように展望された都市シュトラスブルクの将来を担うべき後進の育成は、何よりの関心事であった。そして、そのための教育の編制こそ、彼の最も得意とするところであったと、クネッパーは言う(S.142)。その構想の核心こそ、「剣闘学校」なのであった。この学校は、すでに前稿でもエンゲルやパウルゼンの叙述を引いておいたように、大学(Hochschule)と民衆学校(Volksschule)との中間に位置するものであった。名称からだけでなく、その位置づけからしても、明らかに今日のGymnasiumに相当している。この学校があくまでより高度の学校に行けない民衆学校(kintliche Schule、Kinderschule)の卒業生のための受け皿であること、教会の学校と競争するつもりはないことなどを強調しているその構想の趣旨については、すでに前稿でも触れている。ここでは、ヴィンプフェリンクが力点を置こうとしていた教育内容、ないしは教育方法について、クネッパーにしたがって(SS.143 ff.)整理しておこう。ヴィンプフェリンクは、ここで雄弁、道徳など市民の教科に配慮したが、とりわけ意を用いたのが「歴史」であったことは、これまで紹介した「第一部」の内容からも当然であろう。

「歴史」の教授、ことに母国ドイツのそれがこの種の古典語を主たる教育内容とする学校で重視されたことは異例と言え異例ではあるが、ヴィンプフェリンクにとっては当然すぎるほど当然なのであった。しかしながら、その必要性は、シュトラスブルクの行政の現実的な運営にもとづいて

いた。その趣旨は、この都市に関する可能な限りの資（史）料を集め、それを整理し、分類して、この都市を担うはずの後代に伝えるということであった。もちろん、フランスとのライン地方の領有をめぐる緊張があるにしても、ただそれを正当化するためという局所的な理由によるものではない。そのような問題に対処するためにも、自分の『ゲルマニア』がそうであったように、多くの図書史料を博搜し、教材化していく努力が要請される。歴史は、前代を考量、評価し、それによって後世の判断のための尺度を得ることで、まさに後代を教えるのである。ヴィンプフェリンクは歴史の効用をこのように説く。歴史は、誠実に過去の特記すべき事績を記録し、自由の保護、歴代の教皇や皇帝から賦与された特権、すなわち戦争と平和の助言者であることを鼓舞している。これに先立って、ヴィンプフェリンクは教育計画の方法的な原則を提示している。貴族の家門や都市から蒐集した有名な事例を援用して、それを青少年の基本的で学問的な訓練に用いるべきで、それによって多くの恵福がもたらされる、と言っている。ヴィンプフェリンクはあっと言わせるような事例を援用した直観を用いて怠惰の悲しむべき結末を市友たちの心理に訴えた。若者の狩猟や鷹狩り（鳥刺し）、欲情、放埒が幸福をもたらすのではなく、また上品ぶった髪型や派手な服装で肩で風を切って歩くことや浴場や旅館を彷徨するといったことでもなく、真の紳士は、自分の精神を端正に、徳を啓発し、慰めを求め、わが国家と共益、さらにはわれわれすべての名誉と栄光、自己自身の認識と魂の不滅、信仰の維持と礼拝の確認、永遠なる生命の追求に向けて学んでゆく。ヴィンプフェリンクは、このように教育（学習）の過程を概観している。

ヴィンプフェリンクは、その習得によって決定的な知恵が習得されるとして、ラテン語教授擁護論も展開する。当代においては、その「国際語」としての必要性は様々なところで実証されている。最も「近代的」な職業分野とされる商業や交易の場合、その範囲が広がれば広がるほど、契約や為替、さらには取引など、ラテン語による文書（ぶんしょ）の読解と会話の能力が求められた。もちろん、教会においては、司教などの上級聖職者は、聖書をはじめ、各種の文書（もんじょ）に通じていなければならない、また司祭や説教師などは当地の言語による説教などの日常にも対応しなければならない。活版印刷の普及は目を見張るものがあったが、ドイツ語による聖書の出現と普及は16世紀の20年代、ルターによる翻訳作業を待たなければならない。とは言うものの、当代においては、ラテン語を教える学校が高級で、ドイツ語などの当地の言語を教える学校が低級であるという理解は正しくない。それはあくまで19世紀の中等教育再編の過程で生じた議論の非歴史的な遡及による推断であって、そもそも16世紀の初頭には、このような議論が対応する実態は存在していない。ラテン語が必要かどうかは、彼らが国境を越えた職業を目指すかどうかということと密接に関係していたのである。そのようなことと関係なく、飾りのためにだけ学習しようという傾向がなかったわけでもない。そのような「危険」性について、ヴィンプフェリンクは、こう指摘している。「この言語で十分でないと思っている学識者は、父なる国や都市の声望や信用をつねに重要に思っている」。さらに、ヴィンプフェリンクは、「きちんとした教育を受けずに、頌詞を綴ることさ

えできない教養のない者は、家畜のように生き、家畜のように死ぬしかないのだ」とさえ酷言するが、これはシュトラスブルクのような大都会には、無為徒食の道楽者がかなり存在していたという事実を裏付けている。その盛期から1世紀近く経って、イタリアのルネッサンスの都市文明の負の部分はこの地に到来し、それと同様に識者の眉を顰める状況が現出されていたというわけである。しかしながら、その状況はさらに深刻でもあった。ヴィンプフェリンクは、学芸を排斥し憎悪する徒輩が歴史を判断することの結末を憂慮さえしているのである。『ゲルマニア』をあえてドイツ語にして、参事会員たちに手渡した状況が思い浮かぶ。

信仰の部分についても、参事会員の実践的な義務として、神への祈り礼拝への出席、然るべき祭礼への参加などが求められている。例えば、断固として立ち向かうべきこととして、つぎのようなことが挙げられている。礼拝のさいのざわつきやその他の邪魔な行為に対して、祭日前夜の?神の行いに対して、四旬節の祈りを公然と無視することに対して、酒場での止むことのない酒盛りに対して、迷信や背徳、禁止されている悪ふざけ、犯罪者の登用に対して、老齢や病気のものへの喜捨を奨励する一方、健康な乞食に対して、……。このように、その記述は詳細をきわめている。しかしながら、この部分は、すでに述べたように、都市参事会員の実践的な義務として説かれたものであって、「学校」の範疇（例えば、宗教教授）での問題ではない。したがって、ゲルマンの歴史認識、古代と中世の合体した「敬虔なる雄弁」、これをまとめとして、あえてこれ以上の紹介は行わない。このアマルガムこそ、後代のギムナジウムの教育内容を根底において規定するはずだったからである。かくして、ヴィンプフェリンクは、都市シュトラスブルクへの熱狂的な称賛で、この章を締めくくっている。

このようにして、ヴィンプフェリンクの『ゲルマニア』は、クネッパーも言うように（SS. 147 f）、ここに、ひとりの「ドイツ人」が人文主義者、教育家、さらには篤信の人物として現れたと言ってよいが、その内実はそう単純でもない。例えばユダヤ人に対しては、多くの人文主義者と同じように、あえて本音の商業上の理由を隠し、表面的な信仰上の理由で参事会による排斥に積極的な姿勢をみせていたし、その都市の基本構想は名望家市民を主たる担い手として想定されていた。これは、明らかにイタリアのルネッサンスをモデルとしており、また古典古代、ことにギリシアのポリスのしくみの再版であるとも言ってよい。

『ゲルマニア』の後日談

最後に、この『ゲルマニア』、とくに、その学校構想がたどった道をかいつまんで記しておくことにする。前稿で述べておいたように、この提案に対して、市参事会はそのドイツ人としての市民精神の鼓舞の響きに対して12金グルデンの報酬を支払い、弟子たちはそれを祝った。しかし、早速、

反対者が出現した。ヴィンプフェリンクに立ちはだかったのは、フランシコ会の跣足修道士出身のトマス・ムルナー（Thomas Murner 1475-1537）という人物であった。彼は、その風刺的な詩作で知られていた。ヴィンプフェリンクはムルナーとはこれまでも親交があり、印刷に付されるまえの『ゲルマニア』の草稿もそのような関係から贈呈したと思われる。『ゲルマニア』のドイツ語版の市参事会員への配布とさほど時間を措かないで、ムルナーの『新・ドイツ』（*Neu Deutschland*）が発表され、ヴィンプフェリンクの「誤り」を指摘したとき、ヴィンプフェリンクはわが眼を疑い、まさに驚天動地の衝撃だったことは想像に難くない。その辛辣な風刺家は、その文書のなかで、エルザスのドイツへの帰属とカルル大帝の出自について、まさに天眼鏡（ルーペ）で検査するような吟味を行った。そのムルナーの文書自体、もともとはヴィンプフェリンクに宛てた手紙に添付されていたもので、そこではこれを印刷するようなことはないなどと言っていたものであるから、話は拗れに拗れた。ヴィンプフェリンクがかなり直情的で熱血の人物であることは知られている。ヴィンプフェリンクはこのようなムルナーの行為を背信と受け取ったのである。ヴィンプフェリンクがムルナーに宛てた激怒の手紙が残っている。「君は、この間の四句節に語り合い飲み食いしたばかりなのに、そのことを承知のうえで私にあえて喧嘩を売ってきた」と言って、「どのようなことも反証可能だ。まもなく、君の意見は火中に投げられるし、世界からも放擲されるだろう」と大変な剣幕であった。「君の『新・ドイツ』の印刷は、私の名誉や評判、そしてわが祖国、シュトラスブルクの自由と栄光、さらには（神聖）ローマ帝国に対してなされた背信行為なのだ」とまで言い切っている。ヴィンプフェリンクの反論はまもなく『反対者を安んじさせる説明』（*Erklärung zur Beschwichtigung des Gegners*）として公表された。ここには、ライン左岸がドイツ領ということの「新証拠」も出された。その多くは、例えばドイツに差遣された教皇の使節がエルザスに派遣されたとか、教皇庁がこの地方をドイツのものと認めていた、さらには選帝侯たちの活動もエルザスがドイツのものであることを認めていた。だからこそ、彼らはたったひとりのドイツ人を帝位に就けたのではないか、エルザスのものたちもハプスブルク家のルドルフを選んだのではないか、といった類の話であった。そして、フランスの記念碑やその碑文の間違いが指摘され、その結論は揺るぎないと強調された。

前稿では、ヴィンプフェリンクの学校改革案がムルナーの反対によって実現できなかったと示唆し、その理由は主としてそれに掛かる経費の問題から、さらにはそのあとでの経過からみて大聖堂の学校の改良で間に合うとされたからだったのではないかとの記述に止めていた。しかしながら、事実はそう単純なものでもなかった。クネッパーは、このような「決闘」同然の争いの過程で、ヴィンプフェリンク自身はムルナーの鋒先がどうやらギムナジウム改革を標的にしていると思い始めたと述べている（S.151）。1503年3月1日付けの友人トマス・ヴォルフ（Thomas Wolf 1450-1511）宛の手紙で、ヴィンプフェリンクは、こう言っている。「狂信的な司祭の側から、自分の計画への陰謀がめぐらされており、私の名声への攻撃でこれをカムフラージュしているが、彼のねらいは、

世の関心を呼んでいる「学校計画」が既存の修道院学校にとって危険な存在で、それを潰すというところにあるようだ。ヴィンプフェリンクの学校計画はひとまずはお蔵入りとなったのであるから、結果からみれば、ヴィンプフェリンクの見解を単なる邪推とか勘ぐりだとして片付けることもできない。しかし、実際のところそれを確認する術は今のところない。前稿では、主として参考にしたエンゲルにしたがって、あくまで経費の問題だったように記したが、これについてもはっきりとした証拠は今のところ見出すことがない。

おわりに

ムルナーとの筆闘は、まもなくヴィンプフェリンクの弟子たちに受け継がれて、1505年になっても終息する気配はなかった。ヴィンプフェリンクは、まもなくその第一線から身を引いて、後に『ドイツ人の歴史』(*Geschichte der Deutschen* 1502)としてまとめられる著述に専念した。1505年の増補にあたって、ヴィンプフェリンクはそれが目立つように印刷上の工夫をした。そして、これは、人文主義の時代に出版された高価な書物のひとつとなった。この「補遺」のはじめのほうで紹介したラインの事典のヘーнкの記述にある1505年というのは、この有名となった書物の刊行の年であったのかも知れない。

なお、その学校計画は、すでに前稿でも記したように、いずれにしても、彼の存命中には陽の目を見ることはなかった。ただ、VähtschulないしはFechtschuleのギリシア語由来のラテン語であるGymnasiumだけが記念碑として残り、実体としてのその充実は、はるか後裔のヨハネス・シュトゥルム (Johannes Sturm 1507-1589) などの手に委ねられることになるが、その間の複雑な事情については、すでに前稿でおおざっぱに記述した断片以上のものを、今のところ持ち合わせてはいない。

「剣闘学校」

まえおき

ここに訳出したのは、ヴィンプフェリンクの『ドイツ、都市シュトラスブルクとラインの流れの栄光のために』(*Tutschland zu Ere der Statt Strassburg und des Rinstroms*)にある「剣闘学校について」(Von einer Vähtschul)である。テキストには、『ゲルマニア』のドイツ語への訳者でもあったモシャロッシュの1648年のドイツ語訳(シュトラスブルクのミュルベンMulben書房から刊行)を用いた。これは、ミュンヘンのバイエルン州立図書館に所蔵されており、ウェブで

その原文を見ることができる。なお、本書にはページ番号が記載されていないが、当該の箇所は、そのウェブのシート番号では34、31、32にあたる。順序が混乱しているのは、入力時の手違いによるものと思われる。なお、訳出に当たっては、Sammlung der bedeutendsten pädagogischen Schriften aus alter und neuer Zeit. Ferdinand Schöningh. Paderbornの*Jakob Wimpfeling's pädagogische Schriften*. übersetzt, erläutert und mit Einleitung versehen von Joseph Treundgen 1898. SS.376ff. に収載されている「剣闘学校について」(Von Fechtschule) を参考とした。(三輪 貴美枝)

初歩的な文字さえまだほとんど読めないうちに民衆学校 (Kintliche Schulen) を早々に後にして、そのうえさらに5年、少なくとも3年もご子息を自由学芸の学校に送っていることは、はたして有益で良いことなのだろうか。諸君の都市では、そのために使える建物さえあれば、費用は一切共同の財布には頼らずに、この種の学校は開設することができる¹⁾。諸君の息子が、故郷で、家族とともに暮らしながら、しかも多くの費用を出すこともなく、短期間に、大学 (Hohe Schulen)、おそらくローマに代わるような有益な教授 (anweisung) を受けることによって、聖職者や公証人、書記官の職に就き、また外国への交易に出られ、枢機卿の側役などの地位と名声を得るようなことになれば、こんな良いことはないだろう。義務を怠っているとやうつもりはないが、両親や親類の寛大さの結果、鷹狩り (鳥刺し) に夢中となり、飽食や怠惰、遊興、そして洒落に耽り、男女とも粗悪な社会 (Gesellschaft) に惑わされて、その心身を台無しにするよりは、はるかにマシなことであろう。これとともに、そうした学校が教会や修道院など他の学校に損害を与えられないように、私の見解は、このような学校がすべての子どもを無差別に受け容れることを求めているわけではなく、すでに2、3年は他の学校に通っていた者やもはや通っていない者、そこを去っている者などが対象である。彼らはおのれの怠惰や軽率さによって墮落してゆくか、親に巨額の費用を送ってもらって、よその都市の学校に行くか、すぐに大学に行くしかなかったのである。しかしながら、大学などへ行っても、ラテン語ができず、文法も十分に訓練されてはいないため、アリストテレスの哲学や法学の講義を聴講するために必要な基礎も欠けていた。それゆえ、彼らの生活時間はすべて半端なものに止まり、その結果、人文諸学やラテン語における有用な基礎が欠けているため、教養人のまえではいつも不安気に話に加わらざるをえなくなっている。

こうした理由から、新たに構想される剣闘学校 (nuwe Vächtschule) は、大聖堂の学校や他の司教座の学校 (Schulen des Monsters oder ander Stifften) には、いかなる被害も与えはしない。というのも、その学校があるひとを傷つけたり、誰かを侮辱したりする意図などまったくないからである。少なくとも私の愛する友人であり支援者である「スコラ学」に対しては、そのような気持ちはない。また、剣闘学校によって聖職者の数だけが増えるということを心配する必要もない。この学校では、弁論の書き物 (Geschriftten der Wolredenheit) や倫理の書物 (Sittliche Bücher)

から、そして多くの物語（Geschichten）から、ただ聖職者身分に限らず、市民や騎士、そして市参事会員の身分にとっても役立つような教材が教えられる。何はともあれ、この幸いをもたらす理解や配慮から、これまで聖職者身分が与えられてきたよりも多くの諸君の都市の息子たちが有能な人物に育ってゆくというのであれば、それは何よりのことではないだろうか。皇帝や司教から与えられている聖職禄が貴族や市民から寄付され、諸君の子どもたちや孫たちのために善用されることになれば、他の都市や領邦、さらには外国で生まれた者が自分の相続に備えるために自力で生計が立てられるようにしたり、親族や友人に親切にして、また慈善活動に取り組めるようにしておくなどということなど、これまでに諸君が経験しなくてはならなかったことは、都市の評判や福利を低下させることなく緩和されることだけは確かであろう。諸君のこの剣闘学校においては、選り抜きの教師（Meyster）によって教育されるはずの若者たちは、賛美歌の歌い方をまったく練習しないままに、祝祭前夜にはこれを試演し、その翌日の日曜日や祝祭日には機会が与えられても、近在の教会のミサで歌うほどの実力を示すようになるであろう。

註

- 1) 教師の生活費は、生徒の親が支払う授業料によって負担されていた。（1898年のSchöningh版の注記）

「子どもの教育」

まえおき

つぎに訳出したのは、ヴィンプフェリンクの『ドイツ、都市シュトラスブルクとラインの流れの栄光のために』（Tutschland zu Ere der Statt Strassburg und des Rinstroms.）にある「子どもの教育について」（Von Anweisung der Kind）である。本書には、続いて「娘の教育について」（Von ziehung der Döhter）が叙述されているが、今回は訳出していない。ただ、このことから、前者が息子の教育であり、しかも「教育」にあたる用語の使い分けから、そこでは「知育」の側面が重視されていることに容易に気づく。テキストには、上記の「剣闘学校について」と同様に、『ゲルマニア』のドイツ語への訳者でもあったモシャロッシュの1648年のドイツ語訳（シュトラスブルクのミュルベンMülben書房から刊行）を用いた。なお、この部分は、Schöningh版の著作集には収録されていない。当該の箇所は、ミュンヘンのバイエルン州立図書館のウェブのシート

番号では41および42にあたる。（三輪 貴美枝）

子どもが若い時分から信仰（glouben）において、良き道德（gute Sitten）において、自由な学芸（frye Künsten）において教授（underwisen）されるように、また子どもが空腹やみずばらしい状態にならないように、両親はよくみていなければならない。聖アウグスティヌスが幸福生活について語っているように、そのようなことでは心も落ち着かず、学芸を学ぶどころではない。そして、良い教えの泉からは何も造りだせない。子どもには、話しかた、容姿、そして聞き方に支障のないように、ことに舌の廻りかた、きちんとした字句の綴りかたなどに注意してはいけけない。デモステネスが言っているように、技芸と理性に従うことを学ばなくてはならない。どのように切迫した事態になっても、しごとを急いではならない。心や身体のだらしなさを訓練して克服しなくてはならない。戦時においても平時においても、巧みな生きかたを見つけ出さなければならない。神を讃え、神を敬わなくてはならない。人間のあいだで何か尊ばれるものがあるとすれば、それに対して神は尊敬されなくなる。神の御名を用いて呪詛してはならない。神の威光を持ち出し、その誠実、そしてその宣誓によって、軽々しく誓いを立てることがあってはならない。そうすることで、いい加減な誓いに慣れてしまい、誠実や宣誓を軽侮することで、宣誓そのものからの遊離に導かれてしまう。何よりも信仰と誠実によって誓約することで、神に選ばれるのである。両親は、子どもが、父と母、司祭、それに年長者たちのまえに立ち上がって彼らを尊敬しなくてはならないことを教えなければならない。誰の悪口も言ってはならないこと、誰にも嘲り笑ってはいけけないこと、誰も軽蔑してはいけけないこと、また誰にも悪口雑言、脅迫的な言葉でひとを傷つけることがないこと、瀆神の行い、窃盗、嘘言、強盗は嫌悪される。罪を助長してはならず、悪い社会（Gesellschaft）から離れなければならない。公正と正義が教えられなければならない。自分自身の意志を自賛すること、そしてとりわけ放埒や怠惰は避けなくてはならない。卑屈になったり、柔弱で臆病なことも嫌われる。高飛車にひとを見下すこと、恥知らずな振る舞いがあるてはならない。尊敬すべき社会というものは、徳（Sitten）を直観させ、適度の公正さを愛することを求めている。豊かさへの希望をもつことで、それがすぐに徳（Tugend）と良き習慣（gut Gewohnheit）を用意できるとは限らない。荒れ野や泥地で植物を育てることは避けなくてはならない。そのような環境では、心情や気質の活動性を止めてしまうことが常態になってしまうからである。そのようなにならないためには、その生活、別の方法をとったほうがよりよい。怠惰の気分を拭い去ることに気を止めておくこと、例えば遊びの代わりに歴史を、がらくたの代わりに愉快地にさせるものを、怠惰の代わりに書きものを与えるがよい。外国にあって、帝国の会議で王侯のそばにあって、また外国の雄弁家をまえにして、彼らを称揚し、友人を愉快地にさせることで、共同体に利益が、シュトラズブルクに名誉と希望が永遠に産み出されることを願って。

(付 記)

この「補遺」を草するにあたって、前稿とおなじように三輪貴美枝教授（滋賀大学教育学部）に分担をお願いした。ヴィンプフェリンクのふたつの文章の邦訳である。特別な辞書が必要とされる難しい作業であったが、多忙な学務のなかで、またもご苦労いただいた。

多分にお世辞だと思われるが、前稿の評判は、「あなた（がた）にしかできない」などという過分なものが多かった。それにしても、自分としては満足するにはほど遠く、このような「補遺」などを残す始末となった。梅根 悟先生があるとき、「ヒストリーというのは、観てきたように書くものだ」と、あの、もそっとした調子でおっしゃったことがある。とうていその域には及ばないが、すこしでも近づければと思いつつも、今回もまた中途半端で留まらざるをえなかった。

(30 Sept. 2015 Y. Y.)